

佛教大学 総合研究所報

Research Institute of Bukkyo Univ.

2021.3 No. **42**

- 巻頭言
- 2020(令和2)年度 共同研究活動報告
- 2020(令和2)年度 新規共同研究紹介
- 2020(令和2)年度 共同研究進捗評価の実施
- 佛教大学総合研究所紀要第28号 目次
- 佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集第8号 目次
- 佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集第9号 目次
- 彙報

総合研究所の30年と佛大アカデミズム

総合研究所 所長 野崎 敏郎

総合研究所30周年

本年度末をもって、佛教大学総合研究所が発足してから30年の節目を迎える。本研究所はこの30年間どのような活動を展開してきたのか、またその標榜する「総合」とはなにかについて、限られた字数で包括的な論述をなすことは困難だが、発足当時の学長・伊藤唯真が提唱した「学際的視点」「専門諸科学の総合」という見地（本研究所『所報』第1号、1991年、1頁）は、たしかに今日にいたるまで継承されている。また高橋弘次元学長は、本研究所の活動が「時代の要請」に答えるものであることを特筆しており（『所報』第5号、1993年、1頁）、こうした問題意識もまた、30年間を通じて、共同研究に参加した者たちがたしかに共有していた。

ここでは、本研究所の活動が体现している佛大アカデミズムの特色について、素描を試みる。

佛大アカデミズムの特色①仏教精神の現代的使命

仏教精神を、衆生の救済をめざす精神と捉えようと、苦難に直面している人々を物心両面で支えるのが、その直接の使命だと考えられる。現代における仏教精神の生きた存在形態がどのようなものであるのか、またわれわれ凡夫が生涯においてなにをなすのかを探求することは、本学における研究活動の根幹に根ざしている。

佛大アカデミズムの特色②厳密な実証と歴史検証

研究対象が経典や文学作品等の文献であれ、社会事象等であれ、本研究所の刊行物にしめされている研究成果には、第一次史料や調査結果や基礎文献を網羅的に検討したうえで、研究対象の歴史的背景や生成過程を究明し、対象の歴史的定位を明示しようとする厳密性がしめされている。

とくに、遺されている文献が乏しい古い時代の事象にかんしては、基礎文献とされているのが、後世の者たち——しばしばその時代の権力に左袒していた者たち——によって著された史書等であるケースが多い。したがって、そうした文献に記されている事項をそのまま鵜呑みにすることなく、むしろこれにたいする周到な史料批判・文献批判を旺盛に展開することが不可欠である。

本学の研究者たちは、このことを自覚し、また若手を鍛えるさいにもこの観点を貫いてきた。歴史に真摯に向きあうことをたえず意識し、また学生にたいしても——さらにそのほかの誰にたいしても——それを求めることは、本学の研究者たちが真正のアカデミズムに属している証である。

佛大アカデミズムの特色③現場主義

研究活動において、《そこに足を運ぶ》ことによってはじめてみえてくるものがある。国内外の地域の現場、教育活動・医療活動等々の現場、あ

るいは民俗芸能が披露される現場に立ち、そこで奮闘する人々と苦悩を共有し、彼らとともに考えることは、本研究所所管の研究の特色である。

このことは、特定の地域との直接の係わりをもつ領域に限らず、包括的な歴史研究や理論研究・法理研究等々においても認められる。《安楽椅子》上の一般化・理論化に安住することなく、現場と研究室との往復回数を重ねることを厭わない強靱な精神がここにある。

佛大アカデミズムの特色④アクチュアリティ

学問は、直接にかの《役に立つ》ことをかならずしも目的としていないが、一方で、たとえ高度に抽象的な理論研究や法理研究等々であっても、それが生の現実とどう関連づけられるのかという視座は、本研究所所管のさまざまな研究成果において顕著に認められる。研究対象が歴史事象であっても、それが現代に生きているわれわれにとつてどのような意義を有するのか、遠い異国の事象であっても、それが日本に生きているわれわれにとつてどのような自己省察の素材たりうるのか——こう問いかける姿勢が、佛大アカデミズムの基底に存している。真摯なアクチュアリティ——われわれがいま直面している問題への接点——の認識が、研究と現実とを結んでいるのである。

佛大アカデミズムの特色⑤大学教育への貢献

近年の共同研究のなかには、大学教育のさまざまな局面を研究対象としたもの、また大学教育が今後どうあるべきかを問いかけるものがある。われわれの教育活動そのものを、研究者の醒めた目で検証し、学生層の変化を捉えつつ、教育活動の向上・刷新を図っていくことは、本研究所の重要

な任務となっている。

佛大アカデミズムの特色⑥国際性と学際性

共同研究のなかには、諸外国の研究者との協力のもとですすめられているものがある。ほぼ同じ研究領域であっても、日本のアカデミズムにおける研究手法と、他国におけるそれとは、しばしば大きく異なっており、研究過程においてそれが可視化される。また学際的な研究の場合、異なる研究領域で活動している研究メンバーのあいだで、やはり方法論をめぐる問題が顕在化する。そしてそのうえで充実した研究交流を図っていくところに、本研究所の活動の醍醐味がある。

佛大アカデミズムの特色⑦闊達な討議

たんに異なる国の研究者を集め、あるいは専門の異なるメンバーを集めたというだけでなく、本研究所所管の共同研究においては、視座も方法論も異なる人々によって闊達な討議がなされ、また相互理解が深められてきたことが重要である。このこと自体が、共同研究の参加メンバーにとつて大きな知的財産となっている。各メンバーは、この《糧》を内面化し、次なる研究課題に向かっていくのであり、この内面化プロセスをサポートするところにも、本研究所の大きな意義がある。

筆者自身は、本学着任後24年間、総合研究所の諸活動を含む佛大アカデミズムから学び、その恩恵を受けてきた者のひとりとして、今後も本学の学術研究の発展に寄与し、またそれを次世代に伝えていく所存である。

■常設研究

「南丹市の地域社会と佛教大学の地域連携活動に関する研究」（3年目）

研究代表 近藤 敏夫

研究組織

<研究員>

近藤 敏夫 社会学部教授

原 清治 教育学部教授

小林 隆 教育学部教授

平田 豊誠 教育学部准教授

大藪 俊志 社会学部准教授

大東 貢生 社会学部准教授

水上 象吾 社会学部准教授

関谷 龍子 社会学部准教授

中島小乃美 保健医療技術学部教授

金 佑榮 社会学部講師

長光 太志 社会学部講師

<嘱託研究員>

湯川 宗紀 本学非常勤講師

高御堂 厚 美山ふるさと株式会社常務取締役

・研究進捗状況

年度当初の研究計画では南丹市の園部、美山、八木、日吉の4地域でそれぞれの地域特性に応じた課題について調査を行い、また各地域の住民の方々とワークショップを実施するすることとしていたが、新型コロナウイルスの影響のため当初計画を実施することができなかった。

年度途中の11月に研究計画を改めて、過年度までの南丹市との包括協定に基づく教育研究の成果をメンバー各人がレビューすることとした。また、

令和3年2月と3月に Zoom 報告会を6回にわたって開催し、今後の南丹市における教育研究の課題について意見交換をおこなった。

なお、本研究は令和2年度を最終年度としていたが、実質的に調査研究が進まなかったため、令和3年度まで研究期間を1年延長することとなった。ただし、新型コロナウイルスの影響が長引くことが懸念されるため、南丹市での調査研究を展開することよりも、これまで各学部や大学で実施してきた各種の教育研究活動の実績をまとめることとし、あわせて本学と南丹市との包括協定締結の経緯や課題を検討することになった。

大東貢生先生が第2回「美山×研究 つながる集会」（【主催】「森里連環学に基づく豊かな森と里の再生」研究会、2021.2.20）において「学校を中心とした美山の地域づくり」の報告を行った。

公刊業績

高御堂厚 2021.3「南丹市の地域社会と佛教大学の地域連携活動に関する研究」『佛教大学総合研究所紀要第28号』

・研究会等の開催状況

第1回 Zoom 報告会

日時：2021年2月10日 13:00～14:30

報告者（1）：長光太志

タイトル：佛教大学における初級地域公共政策士プログラムの紹介—南丹市美山町でのPBL型地域イ

ンターンシップ—

報告者（2）：水上象吾

タイトル：美山町における学生の学習内容—「公共政策学フィールドワーク実習」の授業を通じて—

報告者：大藪俊志

タイトル：南丹市の地域社会と佛教大学の地域連携活動に関する研究

第2回 Zoom 報告会

日時：2021年2月17日 13:00～14:30

報告者：金佑榮

タイトル：南丹市の地域社会と佛教大学の地域連携活動（これまでのまとめ）—南丹市における地域経済の特徴について—

第3回 Zoom 報告会

日時：2021年2月24日 13:00～14:30

報告者：湯川宗紀

タイトル：美山の「意義」と新しい（明るい？）価値（指標）

第4回 Zoom 報告会

日時：2021年3月11日 13:00～14:30

報告者：高御堂厚

タイトル：初級地域公共政策士養成プログラムの一環としてのフィールドワーク実習（春期）・環境政策特殊講義（秋期）報告 2013～2018年～エコユーズムから見える京都府南丹市美山町の課題～

第5回 Zoom 報告会

日時：2021年3月17日 13:00～14:30

報告者：大東貢生

タイトル：「学校を中心とした美山の地域づくり」

第6回 Zoom 報告会

日時：2021年3月24日 13:00～14:50

■プロジェクト研究

「社会的マイノリティ集住地域における「まちづくり」の総合的研究」（3年目）

研究代表 後藤 直

研究組織

<研究員>

後藤 直 教育学部教授

堀家由妃代 教育学部准教授

<嘱託研究員>

山本 崇記 静岡大学人文社会科学部准教授

藤井幸之助 同志社大学嘱託講師

高野 昭雄 大阪大谷大学教育学部准教授

塚崎 昌之 本学非常勤講師

菅野 泰敏 京都市学校歴史博物館博物館主事

島田 隆之 京都市染只児童館館長

井川 勝 本学非常勤講師

本岡 拓哉 同志社大学人文科学研究所 専任研究員（助教）

研究進捗状況

研究プロジェクト最終年となる3年目は、コロナ禍「緊急事態宣言下」でのスタートとなった。宣言の発出自体は約2か月ほどであったが「コロナ対策ガイドライン」により、様々な制約のもとでの研究活動となり、2年目後半実施予定の実態調査（住民ヒアリング）が行えず、解除後6月から少しずつ感染拡大防止対策を打ちながらの取組を実施してきたものの、8月までは事実上研究活動がストップとなった。

千本地域の実態調査は9月から2021年2月にかけて実施（詳細は後述）することができたものの、10月末実施予定だった「開キ町・池上町の交流シンポジウム」は中止、衣笠開キ町への実態調査は次年

度に繰り越すこととなった。研究会は、ようやく11月28日に開催することができた。

このようなことから「新型コロナウイルス感染症拡大に係る共同研究への特別措置」申請を行い、研究プロジェクトが2022年3月まで一年延長となった。感染防止対策を十分にとった活動形態・内容に修正して、研究成果を上げ、活動を完結したいと考える。修正した今年度の研究スケジュールは次のとおりである。

研究スケジュール

9月 千本地域（9・10月）及び紙屋川砂防ダム内集住地（11月）への実態調査（約350戸対象）

11月 研究会（千本調査進捗状況及び砂防ダム内集住地実態調査について）資料調査及び調査データの整理・解析

12月 国内調査（神奈川県川崎市池上町）

2021年1月 研究会（フィールドワークの総括・実態調査データ整理解析）

3月 研究会（3年目活動総括、4年目への修正計画確認）

実際には千本地域への実態調査と11月の研究会のみの実施となり、調査データの詳細な整理・解析や衣笠開キ町への実態調査などは次年度に延期せざるを得ない状況となった。

研究会等の開催状況

第7回研究会 11月28日 15号館1階ホール

第7回研究会は、新型コロナウイルス感染拡大防

止のため少人数での開催とし、研究員や嘱託研究員の他、当研究会の調査対象地である衣笠開キ町の住民の参加もあった。研究会では本岡拓哉嘱託研究員（同志社大学）が、著書『「不法」なる空間にいきる』をもとに、日本国内にみられる在日コリアンの集住地区（不法占拠地区）に関する発表を行った。内容は、不法占拠地区について、歴史・まちづくり・社会性など、行政と住民との関わり、地区内の生活環境、不法占拠地区の居住者に対する人権的な問題の状況といった総合的な視点での発表であった。

衣笠開キ町の住民からは様々な意見や自身の体験談などの貴重な話を聞くことができ、さらに今後予定している衣笠開キ町の実態調査の説明、協議を行うことができた。衣笠開キ町の住民からも調査に対して理解と協力を得ることができた。

質的・量的実態調査（千本地域住民実態調査）の取組

千本地域の実態調査活動は、9月から調査活動を開始し、12月に差し掛かった時には、新型コロナウイルスの感染状況が第3波を迎え、年明けと共に約2か月の緊急事態宣言発出期間があり、対面での実施が難しくなった。

協議の結果、1月末に調査用紙送付（実際は各戸へのポストイング）による方法を取り、結果回収に努めた。3月中旬に若干の調査結果を回収することができ、下旬に千本地域の調査結果を一定集約することにした。

2月1日時点での集計結果は、千本地域登録世帯数271軒、回収世帯数137軒、回収率51%であったが名義はあるものの実質空き家世帯や恒常的不在世帯が40軒判明したため、母数を減じると6割近い実質回収率となる。

各項目の結果の特徴的な傾向をみてみると、

- ・世帯人数は、全体の半数が単身世帯で、2人までの世帯数は全体の8割を占める。

- ・主な世帯収入は、年金収入世帯が全体の4割強、給与収入世帯（35%）を上回る。

- ・年齢構成は、60代以上が半数を超える。（2人に一人が60代以上）

- ・教育状況での回答された校種で最も多かったのが中学校（4割）、次いで高校（3割）で「卒業」と回答した割合は8割であった。

- ・仕事従事者は全体の4割弱、3割強が家事従事者、14%が通学生で同程度の「それ以外」と回答する層が存在する。

- ・仕事従事者の就労形態で最も多いのは正規職員であるが全体の半数に満たない。ついでパートタイム勤務者が4分の1と多い。

- ・健康保険制度や公的年金制度の結果から、共済保険や共済年金制度加入者が1割未満であることから、かつて（行政による実態調査実施時期）の公務員世帯が多かった状況から大きく様変わりしている。

- ・世帯収入は各層にほぼ均等に存在。最も多いのが100～149万円（7%）であった。

今後、さらに詳細な分析が必要だが、大まかに高齢・単居、低所得という姿がみてとれる。このことから福祉や医療の分野における対策が必要であることが容易に想像できる。今後、衣笠開キ町の調査も実施し、両コミュニティの実態・課題を明確化し、本研究会が設定している「共生のまちづくり」という研究目的の達成をめざしたい。

■プロジェクト研究

「教師の指導力”気づき”の解明のための国際的・学際的研究—教育実践学と脳科学の融合—」（1年目）

研究組織

<研究員>

松村 京子 教育学部教授

山口 孝治 教育学部教授

小林 隆 教育学部教授

高見 仁志 教育学部教授

二澤 善紀 教育学部准教授

平田 豊誠 教育学部准教授

波多野達二 教育学部准教授

青砥 弘幸 教育学部准教授

<嘱託研究員>

Lerkkanen, Marja-Kristiina

ユバスキュラ大学（フィンランド）・

教育・心理学部・教授

渡辺 恭良 理化学研究所 生命機能科学研究センター

健康・病態科学研究チーム・チームリーダー

水野 敬 理化学研究所 生命機能科学研究センター

健康・病態科学研究チーム・上級研究員

渡辺 恭介 理化学研究所 生命機能科学研究センター

脳ネットミクスイメージング研究チーム・研究員

<学術研究員>

西田美由紀 教育学研究科 博士後期課程

篠田 裕文 教育学研究科 博士後期課程

研究進捗状況

本研究では、教師の授業時の指導力、特に児童の行動に気づく能力について、国際的、学際的に研究を進め、教育実践研究、視線分析研究、脳科学研究

研究代表 松村 京子

の視点から、教師の“気づき”を明らかにしていく。教育実践研究では、フィンランドの教育系大学でも古く権威あるユバスキュラ大学教員養成学科の研究ディレクターであるLerkkanen教授と共同研究を進める。また、脳科学研究では、理化学研究所生命機能科学研究センターの健康・病態科学研究チーム渡辺恭良チームリーダー、水野敬上級研究員、渡辺恭介研究員との共同研究を行う。

2020年度(1年目)は次の2つの研究を推進した。

1. 日本とフィンランドの優れた教師の授業分析研究

目的

両国の優れた教師の授業を、Stipek & Byler (2004)による授業分析尺度ECCOMを用いて分析を行い、両者の共通点と相違点を明らかにすることを目的とした。

方法

参加者：日本とフィンランドにおいて、校長或いは教育委員会から推薦された小学1年生の担任教師6名を優れた教師として、研究対象とした。被験者の依頼時には、研究計画を説明し、同意を得る。また、データの分析に当たっては個人が特定されないように配慮し、外部に漏洩しないように管理する。分析終了後も、個人が特定されない形式で結果を公表する。以下の研究も同様である。

測定時期：年度の最後から1～2か月前として、日本は2～3月、フィンランドは4～5月に測定を行った。測定：推薦された教員の授業の2及び3時間目を3～4台のビデオカメラで教師及び全児童の行動を録画した。

分析：録画された映像を再生し、授業の状況をECCOMにより分析した。

結果

現在、分析中である。

2. 授業中の児童の行動に気づく教師の能力に関する視線分析研究

目的

教師は授業中の様々な手掛かりをもとに児童の行動を理解し、短い時間の間に児童への対応の意思決定をしなければならない。経験豊富な教師は、児童に注意を向けて児童の活動を把握し、それをもとに授業中に自分がどう行動するかを瞬時に判断しているという(Ainley & Luntley, 2007)。また、児童の行動に敏感で児童の興味を逸らすような意思決定はしないことが報告されている(Lobman, 2006)。即ち、優れた教師は、絶えず児童を観察し、瞬時に気になる児童の行動を捉え、適切な意思決定を行っていると言える。筆者らは、このような気になる児童の行動を的確に捉える教師の“気づく”能力をアイトラッカーで分析し、明らかにしてきている(Yamamoto & Imai-Matsumura, 2013)。本研究においても、教師及び教員養成大学学生の授業中の児童に“気づく”能力をアイトラッカーで検討することを目的とした。

方法

視線測定：Tobii製アイトラッカーT60を使用した。方法：教師が指示通り行動しない児童(ターゲット児童)に注意する場面の映像を参加者(教師または教員志望学生)に1分間提示し、その間の参加者の視線を計測した。

結果

(1) 小学校教師

・ターゲット児童に気づいた教師と気づかなかった教師が明らかになった。

・“気づき”は教師の経験年数に関係していなかった。

・気づいた教師のターゲット児童への視線停留回数は気づかなかった教師よりも多いことが明らかになった。視線停留回数は視線対象への興味・関心や懸念を示し、視線停留時間は視線対象からの情報収集を示すとされている。したがって本研究結果から、気づいた教師はターゲット児童を気になる児童として見なして、視線を頻繁に停留させていたことが明らかになった。

(2) 小学校教師と教員志望学生

・ターゲット児童への気づきは教師の方が学生よりも有意に多かった。

・教師と学生の視線の例を図に示す。分析の結果、教師のターゲット児童への視線停留回数は学生よりも多いことが明らかになった。視線1回当たりの停留時間には有意差は見られなかった。本研究結果から、教師はターゲット児童を気になる児童として見なして、視線を頻繁に停留させていたことが明らかになり、学生の“気づき”の能力が教師より劣ることが示唆された。

これらの結果は、論文にまとめ、現在投稿中である。

・研究会等の開催状況

今年度は、メール及びリモートによる個別のミーティングを実施し、研究を進めた。

2020（令和2）年度 共同研究進捗評価の実施

総合研究所では共同研究に対する点検・評価を目的として「佛敎大学共同研究評価ボード規程」に基づき進捗評価および総合評価を実施しており、2020（令和2）年度は1件の進捗評価を実施した。

進捗評価は、当該の共同研究の進捗状況を点検・評価し、研究の発展・促進に資することを目的としている。今年度対象となった共同研究は、次の1件であった。

常設研究「南丹市の地域社会と佛敎大学の地域連携活動に関する研究」 研究代表 近藤敏夫

評価ボードは、評価ボード長となる副学長、研究推進機構長（今年度は、対象となる共同研究の構成員のため、研究推進副機構長が担当）、学長の指名する評価協力者（若干名）および研究推進部長をもって構成され、評価協力者として、学外研究者1名、学内研究者2名に依頼した。

評価ボード（会議）では、匿名性を重視して評価を行うため、評価協力者から提出された進捗状況評価意見書は氏名を伏せた状態で資料とし、意見書に記載された内容について、評価項目に沿って、意見交換が行われ評価が決定された。それを取り纏める形で、評価ボード長により「共同研究 進捗評価」が作成された。進捗評価は、総合研究所運営会議へ報告がなされ、次年度以降のあり方ならびに研究期間等について協議され、研究推進機構会議での審議承認の結果をもって、研究代表へ通知された。

審議の結果は、研究期間を2021年度までとし、最終年度において、これまで実施されてきた取り組みのとりまとめを行い、提言をまとめることとなった。

評価ボードによる進捗評価の実施スケジュール

- 5月2日 研究代表へ進捗状況報告書の作成を依頼
- 6月9日 研究代表より進捗状況報告書の提出
- 6月12日 評価協力者へ進捗状況評価意見書の作成を依頼
- 7月10日 評価協力者より進捗状況評価意見書の提出
- 7月30日 評価ボード（会議）を開催し、進捗評価結果を決定
- 9月17日 総合研究所運営会議へ進捗評価結果を報告、次年度以降の常設研究期間等協議
- 10月14日 研究推進機構会議にて進捗評価結果ならびに次年度以降の常設研究期間等について審議承認
- 11月18日 研究代表へ進捗評価結果を通知

佛敎大学総合研究所紀要 第28号

(2021年3月25日刊)

目次

- 〈論文〉
- 長門本『平家物語』と大隅正八幡宮縁起—六郷山縁起を視座として— 筒井 大祐
- 『伊曾保物語』 伝記部に見られる矛盾についての考察 濱田 幸子
- 京都市楽只小学校をとりまく地域社会の状況—1950年代後半を中心に— 高野 昭雄
- ヘミングウェイと頭部外傷
—伝記的事実を通じて頭部外傷とテキストとの関係を辿る— 坂田 雅和
- 〈研究ノート〉
- 南丹市の地域社会と佛敎大学の地域連携活動に関する研究 高御堂 厚
- ショーペンハウアーと唯識—比較思想研究の可能性を探る— 近藤 伸介
- 『大般若波羅蜜多經（初会）』常啼菩薩求法譚冒頭部分の検証 佐伯 慈海

佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集 第8号

—大学におけるアクティブ・ラーニングの影響に関する研究—

(2021年3月25日刊)

目次

研究の目的・背景

大学と地域・企業の連携による教育とは？	大東 貢生
——大学間連携共同教育推進事業プログラムの概要——	長光 太志 全 炳昊 大窪 善人 牧野 芳子 徳井 公樹

学生に関する分析

PBLの評価におけるeポートフォリオ活用の可能性	吉見 憲二
地域連携における大学生の主体的関与とその成果について	全 炳昊
——キャップストーン・デザインの人文・社会系大学生への取り組みを中心に——	
アクティブ・ラーニングでの学びが学生に与える影響	徳井 公樹
——PBL型科目での外部団体とのかかわりに注目して——	

大学に関する分析

アクティブ・ラーニングと大学改革に関連した研究の動向	大東 貢生
----------------------------	-------

企業に関する分析

アクティブラーニングが大学卒業時点の学習動機に及ぼす影響	長光 太志
------------------------------	-------

地域に関する分析

ALによって学生と地域はどうつながるのか？	牧野 芳子
授業での学生の活動が地域社会に与える影響について	大東 貢生
——受け入れ団体の語りから——	
授業での大学の活動が地域社会に与える影響について	大東 貢生
——A市での活動を事例にして——	

学界動向

PBLと大学教育の質的転換の動向	的場 信樹
行政学におけるPBLの可能性と課題	大藪 俊志
アクティブ・ラーニングへの懐疑	大貫 拳学
——学問の新自由主義化に抗するために——	

資料紹介

成長期ベトナムの大学とAL	高橋 伸一
地域連携における大学の課題	近藤 敏夫
企業の選抜手法とアクティブ・ラーニング： ALの問題点とハイパー・メリトクラシー	山本 奈生

佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集 第9号

—東アジアにおけるケアと共生—

(2021年3月25日刊)

目次

はじめに	朴 光駿
子育て貧困世帯の生活状況	武内 一
——全国2,000余世帯の集計結果から——	
共生をめざす非営利福祉協同組織の登場	鈴木 勉
【総説】《類的病者論》と《異邦人的接遇》	村岡 潔
——共生とヘルスケア原論——	
共同体の哲学：相互義務システムとしての共同体	朴 光駿
中国における貧困撲滅と社会保障制度の構築	王 偉
——農村部の貧困撲滅を中心に——	
親密性は果たして家族ケアの特徴といえるのか： 韓国における多様な家族経験の持つ 在宅女性高齢者のケアを中心に	呉 英蘭
「孝」文化の現代的転換の背景の下の 中国家庭養老支持政策の再構築	李 仁子
中国延辺州留守人口の現状調査	崔 文香 劉 芸

彙報

■2020（令和2）年度 総合研究所組織

所長	野崎 敏郎				
研究推進機構	原 清治*	作田誠一郎	細田 典明	坂井 健	水田 大紀
会議委員	荒井真太郎	村瀬 敬子	田中 智子	利木佐起子	中嶋 力都
	森 智女	長谷川順子			
	大西 伸江**				
運営会議委員	野崎 敏郎*	田山 令史	稲永 知世	鈴木 文子	相馬 伸一
	越智 淳子	米林 寿美	長谷川順子**		
紀要編集委員	野崎 敏郎*	田山 令史	稲永 知世	鈴木 文子	相馬 伸一
	越智 淳子	米林 寿美	長谷川順子**		
事務局	米林 寿美				

(*は委員長) (**はオブザーバー)

■2020（令和2）年度 共同研究

No.	研究名	代表名	研究期間(年度)
1	(常設研究) 南丹市の地域社会と佛教学の地域連携活動に関する研究	近藤 敏夫	2018～2021 *1
2	(プロジェクト研究) 社会的マイノリティ集住地域における「まちづくり」の総合的研究	後藤 直	2018～2021 *2
3	(プロジェクト研究) 教師の指導力”気づき”の解明のための国際的・学際的研究—教育実践学と脳科学の融合—	松村 京子	2020～2023

*1 評価ボード（進捗評価）の結果を踏まえ、審議の結果、研究期間を2021年度までとした
 *2 新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、研究計画再考し特別措置により研究期間を延長

■2020（令和2）年度 総合研究所特別研究員

総合研究所では、本学大学院博士後期課程修了者または単位修得満期退学者で、本学において学術研究を希望する研究者に対し、総合研究所特別研究員規程に基づき特別研究員を募集し、19名を採用（採用期間は2020年4月～2021年3月）。

氏名	研究テーマ
肖 越	初期浄土經典成立史の基礎研究—人間学としての浄土教—
近藤 伸介	アーラヤ識とショーペンハウアーの意志
佐伯 慈海	常啼菩薩求法譚の研究
唐井 隆徳	縁起説における触と受の関係について
中西 麻一子	インド仏教美術におけるカーラ龍王の讃嘆図に関する研究
清田 政秋	本居宣長の言語観・歴史観に関する研究
田中 夕子	平安時代後期における貴族の作善について—『小右記』『権記』を中心に—
村田 真一	八幡・応神同体説について—「弘仁官符」から『建立縁起』へ—
濱田 幸子	『伊曾保物語』の江戸時代における受容
田所 弘基	日本近代文学と美術の相関に関する研究
筒井 大祐	『八幡愚童訓』の生成と展開に関する基礎的研究
玉井 晶章	宮澤賢治の生前評価史研究
坂田 雅和	アーネスト・ヘミングウェイの遺伝・事故・病氣と作品に現れるテキストとの関係性の研究
中村 桂子	太宰治文学論—女性名を中心として—
武田 春子	弓削皇子の紀皇女を思ひし御歌四首について
河本 信雄	田中久重の生涯と久重が手掛けた技術の歴史—特に佐賀藩出仕時代における事績
中嶋 奈津子	早池峰大償神楽の継承と伝播—旧南部藩領内における修験系神楽の広がりの変遷
池田 晶	近世日吉社の祭礼の変容と再構築
飯田 隆夫	相模国大山寺縁起と木太刀奉納習俗に関する研究

■活動記録 [2020 (令和2) 年4月～2021 (令和3) 年3月]

- 4月 15日 第1回研究推進機構会議
16日 第1回総合研究所運営会議
29日 第2回研究推進機構会議
- 5月 20日 第3回研究推進機構会議
- 6月 3日 第4回研究推進機構会議
17日 第5回研究推進機構会議
- 7月 9日 第2回総合研究所運営会議
8日 第6回研究推進機構会議
22日 第7回研究推進機構会議
- 9月 9日 第8回研究推進機構会議
17日 第3回総合研究所運営会議
- 10月 5日 総合研究所特別研究員懇談会 (Google Meet 使用)
14日 第9回研究推進機構会議
21日 第10回研究推進機構会議
29日 第4回総合研究所運営会議
- 11月 11日 第11回研究推進機構会議
19日 第5回総合研究所運営会議
28日 「社会的マイノリティ集住地域における「まちづくり」の総合的研究」研究会
- 12月 9日 第12回研究推進機構会議
10日 第6回総合研究所運営会議
- 1月 27日 第13回研究推進機構会議
- 2月 10日 第14回研究推進機構会議
18日 第7回総合研究所運営会議
24日 第15回研究推進機構会議
- 3月 10日 第8回総合研究所運営会議
11日 第16回研究推進機構会議
- * 「南丹市の地域社会と佛教大学の地域連携活動に関する研究」Zoom 報告会第1～6回を次のとおり開催 (第1回2月10日、第2回2月17日、第3回2月24日、第4回3月11日、第5回3月17日、第6回3月24日)

■編集後記

『佛教大学総合研究所報』第42号をお届けします。コロナ禍において、本研究所所管の各共同研究班は、必要な計画変更をおこないつつ、成果を上げつつあります。一方で、予定していた活動の延期や中止を余儀なくされるケースももちろんあり、共同研究や、特別研究員の研究活動をいかに展開するか、また本研究所がそれをどう支えるのかが喫緊の課題となっています。(N)

佛教大学総合研究所報 第42号

発行 2021(令和3)年3月25日

発行所 佛教大学総合研究所

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96

TEL:075-491-2141(代表)

FAX:075-495-2151(直通)

URL <http://www.bukkyo-u.ac.jp/facilities/labo/>